

児童の問題意識を生かした道徳授業の工夫改善

南中野道徳授業研究会

1 研究主題設定の理由

学習指導要領改訂から4年が経過した。道徳の時間が「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）として実施されて5年目になる。どの学校でもある一定レベル以上の道徳授業が実施されるようになってきている。一方、評価を記載することを意識しワークシートを連発するような評価のための授業や、教科書の指導書をなぞるような授業を見ることも少なくない。また、学習指導要領に例示された問題解決的な学習を意識するあまり、設定した問題が児童のものになっていかなかったり、児童の思考と大きなズレがあったりすることも散見される。手段であるはずの問題解決的な学習の実施そのものが目的となってしまっている授業も残念ではあるが存在する。

道徳授業の特質とは、道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習である。その際、児童自身が問題意識をもつことが重要である。

道徳授業における児童の問題意識を児童が物ごとを自分のこととして考える思考ととらえた。例えば、道徳の授業を楽しみにしている。道徳授業で扱う教材の人物に自分を重ねて考えている。自己の生活場面を思い浮かべて考えている。自分と関わりのある集団や社会について考えている等の児童の姿である。

この児童の高まった問題意識を授業に生かしていくことで、道徳授業の特質を踏まえたよりよい授業への工夫改善を目指すべく、研究主題を「児童の問題意識を生かした道徳授業の工夫改善」とし、中野区の主に南中野地域の道徳教育、道徳授業の充実を志す仲間と研究を進めた。

2 問題意識を高める実践事例

これまでの研究経過の中で共有してきたことを踏まえ、児童の立場に立った問題意識を高める実践事例を再度共有した。

- (1) 授業の予告
- (2) オリエンテーションの工夫
- (3) アンケートの工夫
- (4) 導入での工夫
- (5) 複数時間扱いの工夫 連続時間扱いの工夫
- (6) 教材を活用した事例 等

3 問題意識を生かす実践事例

更に、問題意識に着目した研究同人がこれまでその問題意識を生かした道徳授業実践について各々の感じている成果と課題について共有した。

- (1) 高めた問題意識を授業中にどう継続させるか？
- (3) 問題意識をより児童のものにするには？
- (4) 事前調査（特にアンケート）等実施の際、留意する点は？

- (5) 学習の中で児童と問題意識を確認するには？
- (6) 高めた問題意識についての考えを児童にどう問うか？
- (7) 問題意識を生かすことについての検証をどうするか？ 等

3 授業実践事例（第6学年）

(1) 授業概要

①主題名 あきらめないで【A：希望と勇気、努力と強い意志】

② ねらいと教材

ねらい：あきらめないで、字を書こうと努力し続けた星野さんを支えていた強い心を話し合うことで、自分で決めたことを粘り強くやり続けようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

教材：字が書きたい

③ 教材の概要

本教材は詩画集作家として活躍をしている星野富弘さんを描いた教材である。

念願の中学校の体育教師になった星野富弘さん、体育の学習中、高鉄棒で示範演技の際に落下、首から下が全く動かなくなってしまう。毎日毎日寝たきりで病室の天井を見つめ、何もできない日々が続く。その中で、療養中の友人T君の退院を祝い、寄せ書きに挑戦する。どうしてもできない中、口でサインペンを咥えて字を書くことを決断する。その中でできたことは黒い点が一つということ。

その後、星野さんは口にペンを咥えて自分の思いを書き続けることを続けた。それはどのような思いからなのか。そして、その中で、星野さんがたどりついたことはどのようなことなのかということが切々と語られている教材である。

④展開の概要

<導入>

○星野さんが初めて書いた「ア」の字と詩画集を見て感想を交流しながら、問題意識をもつ。

※「ア」の字の由来を聞き、星野さんの詩画集を見ることで、問題意識をもたせる。

◇星野さんが、こんな絵が描けるようになったのはどうしてでしょう今日、みんなで考えたら分かるかもしれません。

<展開>

○教材「字が書きたい」の範読を聞き、主人公の気持ちについて話し合う。

※教材文を敢えて淡々と読みながら「感動」を大切に教材提示する。

1 病室の天井を見つめながら星野さんは どんなことを考えていたと思いますか。
※何ヶ月も天井を見つめる毎日をキーワードとして提示しながら発問する。

2 帽子に黒い点が一つ描けた星野さんの心の中はどんなだったと思いますか。
※前向きな気持ちと残念な気持ちの両者に板書で触れ、次の発問につなげる。

③最後まで練習を続けた星野さんの心を支えていたものは何だと思いますか。

(中心発問)

※再度、詩画集を提示してから問いかける。 ※発言を一つずつ受け止め板書する。

○自分を振り返る。(展開後段)

※中心発問の後、導入で高めた問題意識について触れてから発問をする。

◇これまで努力してできるようになったことはありますか。

※「みなさんは、あきらめずに努力していますか」と投げかけてから発問する

<終末>

○今日の学習を通して、星野さんから学んだことや考えたことはどんなことがありますか。

※継続性のあるワークシートを活用し、学習の感想をまとめる。

⑤評価

○あきらめないで努力し続けた星野さんの心の支えを考えている学習状況を把握する。
(中心発問)

○努力してできるようになった自分のことを考えている学習状況を把握する。
(展開後段)

(2) 考察

① 問題意識を「高める」、そして「生かす」にかかわること

導入で星野さんが初めて口でペンを咥えて書いた「ア」の字をクイズ形式で提示した。その後、詩画集を活用し、同じように口でペンや筆を咥えて書いたことを伝えると、児童からは驚きの声が上がった。その上で、「星野さんがどうしてこんな絵や字が描けるようになったのか、みんなで1時間一生懸命考えたら分かるかもしれないですね。一緒に考えましょう。」と投げかけたことで、児童は、問題意識をもって1時間の道徳授業に臨んだ。

高めた問題意識を生かすために、中心発問の前に再度、詩画集を提示し、「どうですか？考えられましたか？」と問いかけた。改めて自分が考えたかったことを児童は十分に思い起こした。さらに詩画集の文字までも星野さんが描いたものであるという児童の深い理解につなげることができれば、高めた問題意識を児童が自らを振り返る際により生かすことができる。そのためには、中心発問「星野さんの心を支えていたものは何だと思いますか。」を投げかける前に星野さんはものすごく大変なことが数多くあったと

(公社) 東京都教職員互助会

思うが、実際にはやめなかった。」という事実を児童と共有した上で中心発問を投げかけることで、より問題意識に基づき、それを生かすことができたのではないかと思う。本実践を他教材・他の内容項目での実践に反映させていきたい。

② 道徳授業の充実にかかわること

本資料は、道徳科が道徳の時間であったころから、つまり道徳の特別の教科化以前から指導者がストックしておいた教材である。

活用に当たっては、感動的な本教材のよさを最大限に生かすため、以下の2点にまず留意した。一つ目は、敢えて淡々と教材提示することである。ぐっとトーンを落とし、教材文の文章を児童が見ながらの教材提示は、教材の内容とそのよさを児童がしっかりと味わうことにつながった。この教材提示により、発問前の確認や問いかけが簡潔になり、児童とじっくり考える時間を確保することができた。第2発問では、「帽子に黒い点が一つ描けた星野さんの心の中はどんなだったと思いますか。」と投げかけた。前向きな気持ちと残念な気持ちの両者が子供からは出され、それを2つに分けて板書した。両方の気持ちがあることを明確に板書することで価値理解や人間理解、自己理解すなわち道徳的価値を理解する学習につながっていった。

中心発問「星野さんの心を支えていたものは何だと思いますか。」は、道徳的実践意欲と態度をねらいとした本授業の大きなポイントであった。道徳的心情が十分に育っている学級ということが前提になっている。同時に、「家族愛」や「感謝」につながる内容や様々な「努力」の源（くやしき、喜び、夢、自己実現等）につながる内容があり、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える学習にしっかりつながっていた。

そして、振り返りの発問の前の「みなさんはあきらめずに努力していますか。」という投げかけや終末の「学習を通して、星野さんから学んだことや考えたことはどのようなことでしょうか。」という発問は、自己の生き方についての考えを深める学習につながるという思いで授業展開したが十分な検証はできていない。今後の実践での検証が重要である。

4 道徳談義

本研究会は道徳授業、道徳教育の充実に関し、志を同じにする同行の仲間である。時に触れ、道徳授業、道徳教育に対する思いや願いを語り合ってきた。その目的は自身の道徳指導力向上に加え、学校全体や地域の道徳指導力向上にあるからである。今年度は「道徳授業における問題解決的な学習と問題意識の違い」を「道徳談義」の主要なテーマとした。

5 成果と課題

全教育活動の中で、道徳授業にかかわる問題意識の醸成を常に意識した実践では道徳授業の特質を損なうことなく充実した授業が展開できる。児童の問題意識を高め、さらにそれを生かすには前提として、「問題」が児童のものになっていなければならないという昨年度までの主張は今年度も揺るぎなかった。「問題意識を生かす」学習展開は、その「問題意識」について授業の中の様々な段階で子どもに確認したり、意見を求めた

りすることが重要である。特に、問題意識がどの程度子どものものになっているか、そしてその問題意識を生かせるような教材や学習展開か、そして目の前の児童は授業の中でどう捉えているのかを把握していくことが重要である。なぜなら、授業の中で児童にどの程度確認したり、投げかけたり、意見を求めたりするということにつながるからである。

「考える道徳、議論する道徳」というキャッチフレーズが独り歩きした中、現在は「討論しなければならない」というような大きな誤解が若干収まっている状況である。しかし、本来、子ども自身がこの問題をみんなで考えたい、話し合いたいという「考えたい道徳、話し合いたい道徳」と思うようなことが大事だと考えていることは昨年度までの、そして本年度の実践からも同様である。

児童自身が問題意識を高め、それを生かす授業実践に今後も取り組み、その有効性を究め、広めていきたい。